

星の詩二篇

たなか踏基

冥王星の惑星格下の話題で、宙や星への関心が高まっている。私が長年探していた少年時代に執筆した短編と詩が思わぬ機会で見付かった。それは高校の「交友」という名の誌上である。

八月の下旬、千国街道「塩の道」を舞台にした、第五弾「奇妙な異星人」の取材の折、不意に私の目の前に「交友」誌は現われた。私の拙い短編小説と詩二篇が掲載されている。高校同窓の某氏がそれを自宅に保存したものを、友人のアンクルこと高橋昭一君が借りてくれたのである。編集長は守屋義雄君で、吉田邦幸君の短編、高橋昭一君の詩も掲載されている。

何という奇妙な符合であろうか？

実は「奇妙な異星人」各プロット全編に、宙と星をちりばめてある。半世紀時代を遡った「交友」誌に題名『生と死の谷間で』でサブ・タイトルに「短編集」インホスピタル”より”と仰々しく、エピローグに『星の痛み』と題し、以下のような死をモチーフの詩がある。別の詩のコーナーでは、『夜と昼』という、恋の詩が掲載されていたからだ。

星の痛み

閉じられた扉の中に夜があるのだろう。

十字架の様に仕切られた空の中に

星があるのだろう。

そして

白い器うつわの中に死の影があるのだろう。

だから

死の影が揺れると星が揺れる。

キラキラと輝く大鎌が、

獅子座の頭上に振り下ろされると

ひらひらとしたやるせない星が一つ生まれる。

星は

打上花火に自然の大閃光の幻を思っ

ておびえる。

数億年前の光降り注ぐミルクロードを流れる、

アンタレスとヴェガの恋を傍観する

キューピットの矢が

何処かへ今日も飛んでいく。

そして短冊にしたためられた願いを聞く。

姉さんをサナトリウムからかえして！

「あれがいるか座、矢座、ほら！驚座、楯座、

琴座、御覧なさい！南天に射手座の南斗六星、

北斗七星より淡く美しいわね。南の魚のフォー

マルフォルト、ペルセウスの人文字、ペガサス

の四辺形、西魚、北魚、カシオペアが見えるわ、

ほら！プレアデス星団、秋がくるのよ、西天に

ザ・ノウス・クロス(北十字星)白鳥座の別名よ、

私の大好きな星！ほら！ながれ星！・・・」

閉じられた扉の中で夜が廻るから

星が一時間に十五度ずつ廻る

だから星が廻ると

白い器の中の死の影も廻る。

患者はそれに気が付かない

また君も患者だということ。

夜と昼

夜

立っていると

苦しんでる星が一つ

僕に近づいてくる

美しいと思う

その星をつかんでみたいと思う

だが

僕の眼前で

星はすーと消滅する

僕もすーと消滅したいと思う

僕は星を追う

星は苦しみを僕におしつけて

すーと逃げる

僕の手から離れる時

美しく瞬く

僕はそれに魅せられる

昼

立っていると

いつのまにか

苦しんでいる星が一つ

僕の横に立っている

僕はそれを黙殺する

現在執筆の「奇妙な異星人」と、半世紀前の

少年時代の二篇の詩のモチーフの類似性に、愕然としたのである。

了